韓国伝統社会の男と女の役割

—韓日民俗比較試論—

樋口淳*

目　　次

1、暮らしの構造
2、祖先と家の祭り
3、まとめ

1988年4月からソウルで1年ほど暮らした時、韓国の友人たちの案内で村を訪ね、人々の暮らしを学ぶ機会をえた。今回は、その折りのノートを整理して、家と家の祭りをめぐる男と女の役割について考えてみたい。

1、暮らしの構造

フィールドは、慶尚北道の醴泉郡開浦面の佳谷里にある松潭という小さな村である。戸数は、当時40戸。小さな谷の入り口に位置し、村の北と西側に山を控え、南に川をおいた韓国の古い村の典型的な形をそなえている。かつては、英陽南氏松亭公派のみの同族村であったが、後入り筋の金氏も13を数え一つの門中をなしている。

松潭は、セマウル運動の時に大きく姿をかえた。藁屋根と土壁の家

* 専修大学教授、民俗学

を土台から崩し、瓦やスレートで屋根を葺き替える。土のかわりにセメントやブロックを使い、ガラスの明るい窓をつける。かつての地割や棟割りは多少残されるが、建物の構造は変わる。台所の竈や井戸がなくなれば、火の神も水の神も、困るだろう。

私は、伝統的な暮らしの祖型をもとめて谷を遡り、竜岩洞にいたって、金喆炯氏の美しい民家をみつけた(柳川面竜岩洞62番地)。この家は、1930年ころ建てられた比較的新しい家なので、セマウル運動による建て替えは母屋の屋根を瓦に吹き替えるだけにとどまった。この地方に多かった土壁造りの伝統家屋で、三つの棟に分かれ、

①クンバン(大房＝内房)、サンバン(上房)、チョンジ(厨房)、トジャンバン(納戸)を備えた母屋と、

②サランバン(舎郎房)、牛小屋、踏み臼小屋のついた離れ、それに

③倉庫、肥料の灰小屋、トイレットのついた外小屋が、ある。

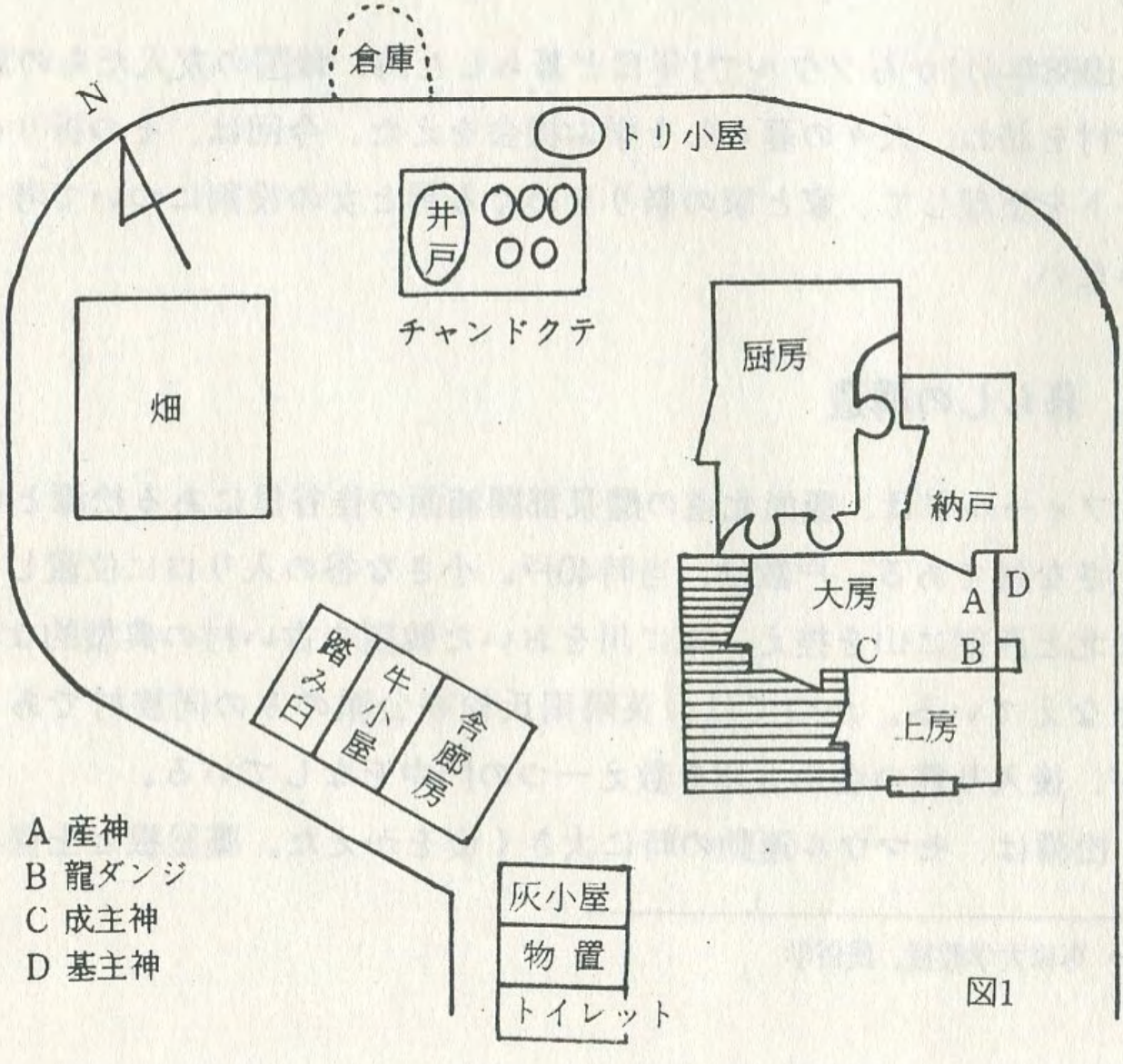

図1

これらの三棟は、図1のように配置され、母屋と離れの間には内庭がある。庭の一角は菜園で、普段使いの野菜などを作っている。台所の前庭には井戸があり、その横にトゥエンジャン(味噌)やキムチなどの保存食を蓄える瓶をならべたチャンドクテ、後ろには鶏小屋がある。母屋は、なだらかな山を背にしているが、その山肌を利用して横穴が掘られて倉庫に使われていた。訪れたのは、ちょうど秋だったので庭一面に茣蓙げられ、真っ赤な唐辛子が干してあった。

金氏宅の生活の中心になるのは、一般には「アンバン(内房)」と呼ばれている母屋のクンバンであり、部屋の奥にはサンシン(産神)の瓢箪Aとヨンタンジ(竜瓶)の瓶Bが祀られている。クンバンとサンバンの間の柱Cは、日本の大黒柱と同じく神聖な役割をもつ太い梁を支え、その空間にはソンジュ(成主)という家の神が祀られている。トジャンバンは、米などの穀物や食べ物を収める納戸だが、その裏Dにはトジュ(基主)という屋敷神の瓶が置かれている。

尚州、安東をひかえたこの地方は、伝統的に両班社会であり、両班家庭の場合には「男女有別」という儒教思想の影響のもとに、男女の厳しい住み分けが行われてきた。特に豪壮な造りをもつ両班家屋の生活は、男たちの場である舎郎房、女たちの場である内房を中心に営まれ、舎郎房は家長、内房は主婦によって管理されていた。

韓国の伝統的な居住形態は、三世代同居の大家族制であり、時には既婚、未婚を問わず長男の兄弟・姉妹が同居することも少なくない。その際、家長は年老いても家の祭祀を司り、家督を長男に譲らず、死ぬまで舎郎房をとりしきる。また、その妻である主婦も台所の竈神を祀り、内房を守り、家計を支配する。

しかし、金氏宅のようなごく普通の農民の住まいをみると、これがあくまでも両班家庭の原則で、大家族でありながら規模の小さい一般農家の場合には、そうはいかないことが分かってくる。農民の間でも、確かに老人は家長として祖先祭祀を行い、大切にされてはいた

が、同時に、若い長男夫婦や、長男の兄弟姉妹のためにも様々の配慮がなされ、住み分けに工夫がなされなければならない。

1988年の私たちの調査によれば、広さの充分でない一般農家の場合、内房(あるいはクンバン)は、生活の中心であり、働きざかりの若夫婦と幼い子供たちが住む。舎郎房は大切な部屋で、客が来たときはそこに迎えるが、一般に老人夫婦が生活するのが決まりで、幼い子供が同居することもある。時によって、老人夫婦がいない場合などは、分家前の世帯主の弟夫婦が住むこともある。

サンバンは小さな部屋だが、結婚前の世帯主の兄弟や、成長した子供たちが住むのが普通である。こうした工夫は、男女の性別よりも世代の別を中心としている。世代や、男女の違いによって必要とされるそれぞれのプライバシーを、できるだけ守るように配慮されているのである。

複数の舎郎房や、サンバンの他にコンノッパン(越房)などを備えた両班家屋の場合ならいざしらず、「草間三間」と呼ばれる一般民家の場合には舎郎房すらなく、マルというの間をはさんで内房とサンバンの二つしか部屋がないことも多かった。しかもこの二つの部屋はオンドルによる保温のためにきわめて狭く、せいぜい四畳半程度にすぎないのである。この狭い空間に三世代が同居するためには、相当の工夫がいったに違いない。

韓国の農家は、田の字型が多く、しかも襖や板戸で間仕切りをする日本の農家とは、かなり構造が違う。しかし、その居住形態の比較でたいへん興味深いのは、内房に住む主婦の「内房渡し」、アンバン・ムルリムの儀礼である。

安東地方一帯の両班社会では、すでに述べたように主人は舎郎房、主婦は内房に住む。しかし主婦は、だいたい50才から60才になると、内房や大庁という板の間にある箪笥の鍵や、台所の管理権を長男の嫁に渡し、コンノッパン(越房)に移り住む。代わって嫁が内房に入り、

家計の一切を管理するのである。

これは日本の「杓子渡し」、「へら渡し」などと呼ばれる主婦権の移譲とよく似ている。かつては日本の場合にも、主婦がある年代に達すると、食事を家族に分配するための杓子やしゃもじを象徴的に嫁に譲り、世代の交代を明らかにする民俗が見られた。

ただ、日本の場合には、主婦の交代は家長の交代とほぼ同時で、家長は「杓子渡し」、「へら渡し」と前後して、「財布渡し」などの儀礼を通じて次の世代に家計の管理をまかせ、家長の座を譲ることが多かった。これに対して韓国の家長は、主婦が「内房渡し」をした後も、家長の座を長男には譲らない。あくまでも家長でありつづける。また、アンバン・ムルリムを終えた主婦も「男女有別」の住み分けの論理に従い、夫とは同居しないのである。

しかし、この原則もまた、よくみると両班社会だけであるらしいことが分かってくる。松潭のような一般の農民社会では、もっと細かく入り組んだ工夫が生きている。

松潭では、内房はすでに述べたように働き盛りの若い夫婦の生活の場である。この場合、親たちは長男夫婦の世帯の確立とともに、内房を譲り渡し、舎郎房に移り住む。場合によっては、長男夫婦に息子が誕生したことを契機に住まいの交換が行われることもあるが、形式的な「内房渡し」などはしないのが普通である。

この場合には、若い世代の台頭とともに屋敷を譲り渡す、日本の隠居制度とよくにた仕組みが見える。ただ、この場合も日本とずいぶん違うのは、家計の管理と家の祭祀権の譲渡がないことである。松潭の場合、主婦は嫁に内房を渡しても、家計は渡さない。また、竈の神をはじめとする、主婦の司る家の神の祭祀権も、よほど年をとって体力、気力が衰えぬかぎり嫁に渡すことはないのである。

韓国の農村の居住形態には、両班型の「男女住み分けタイプ」と、常民型の「隠居タイプ」の二つが併存するようにみえる。

儒教が優位の韓国社会では、両班型の「男女住み分けタイプ」が正しい形で、農民型の「隠居タイプ」の住み分けは、貧しく部屋数の確保できない農民がとったやむを得ぬ措置と説明されそうだが、かならずしもそうとは言えないかもしれない。

農村の支配階級としての両班や、彼らの支配思想としての儒教は、いうまでもなく後代になって成立したものなのだから、むしろ世代別のプライバシーを守る「隠居タイプ」の住み分けが先にあり、儒教による「男女有別」型の住み分け論理が後からやってきたということも、充分に考えられるだろう。

しかし、両班型の「男女住み分けタイプ」の生活も、儒教のみによって説明されるとはかぎらない。家長に支配された男性集団と主婦によって支配された女性集団の住み分けは、儒教のあるなしにかかわらず、人間のきわめて古い居住形態の一つかもしれない。この場合には、松潭にみられるような常民型の「隠居タイプ」が、後代の変形ということになる。そこで、つぎに家の住み分けとならんで重要な祭祀の問題を考えることにしよう。

2、祖先と家の祭り

1) 祖先の祭り

韓国の家長の権利は、家族の監督、財産の管理・運営、家の代表権など多岐にわたるが、その中核をなすのは祖先の祭祀権である。松潭の祖先祭祀は、家で行う家祭と墓に赴いて祭りを行う墓祭とに大別される。

A) 家祭

まず家祭は、死者に対する三年の喪が明けたのちに営まれる祭りで、四代まで遡って祖先を祀る。これには、各祖先の命日に営まれる「忌祭祀」と元旦や秋夕などの名節の朝に行われる「茶礼」の二つがある。

松潭の各本家(大家：クンチプ)では、かつては忌祭祀を年に八回行っていた。この日は、死者(オニ)を迎えるために家の門を大きくひらき、庭の洗濯ヒモなど危険な障害物は、あらかじめ取り除いておく。この様子は、盆の祖先迎えのために墓道を整える日本の慣行とよく似ている。

祭りは、男たちによって行われ、祭祀の権利と義務は家長から長男へと厳しく受け継がれていく。

忌祭祀の前夜になると、一族の男たちが白い韓服姿の正装で次々と集まってくる。祭りの準備は主婦の仕事であり、内房に膳をしつらえ、供え物を用意して、オリオン座の位置で時をはかる。

祭りは、真夜中の12時頃に始められ、夜の白むころ終わるのを良しとされたが、かつては時計もなかったので、星を見て時をはかった。もしこの時をはかり間違えて夜が明けてしまうと、死者(＝オニ)が祭りをしてもらえずにあの世に帰らなければならない。これは、たいへんなことである。だから、時をはかりそこなった主婦は叱られるし、正確に時を告げることなく夜中に早鳴きしてしまったニワトリは直ちに殺された。

茶礼は、元旦や秋夕にさいして年に二度ほど行われる。内房に膳をしつらえ、一族を集めて祭りが行われた。

B) 墓祭

忌祭祀や茶礼が家で行われるのに対して、墓祭は、一族が直接に先祖の墓まで赴いて、墓の前で営まれる。毎年九月の末から十月の二十日までの間に親族が集まり、原則として五代以上前の祖先を祀る。

これらの墓は「上代の墓」と呼ばれるが、松潭の南門中の場合には、直接の始祖となる南桂守の墓が村から4キロほどはなれた竜宮面の元堂洞にあるので、まずここに赴き祭りを行い、しかる後に各祖先の墓を古い順に回る。

距離の遠い墓の場合には、門中の祭田があり、墓の管理者がいて祭りの準備をするが、村に近い墓の場合は、村の宗家（総本家）に集まり、やはり南氏の住む隣村のシンギの大家と協力して祭りを行う。食べ物と酒とを用意して、あちこちの山に散在する墓に詣でるので、車もなく道も悪い時代には三日ほどかかった。餅や果物などの供え物や祭器をかついで山に登るのはとても苦しかった。

墓に着くと、女たちは供物をならべ、祭祀の用意をする。真っ白な韓服をつけた宗家の当主は、祭りを主催する司祭となり、まず自らが墓前に酒と供物をささげると、墓の前に立ち、つぎつぎと礼拝する一族の男たちの杯に酒をつぎ、杯を受け、箸をとって供物にかるく触れる仕草を繰り返す。祭りに使われる杯と箸は一組だけで、司祭としての宗家当主が、祖霊にかわって一族の男と酒を酌み交わし、食事をとるかたちをとる。

こうした堅苦しく儀礼的な祭りがすむと、墓前に捧げた酒と供物を囲んで、一族の楽しい団らんとなる。女たちが加わるのは、この時である。

一通り上代の墓を回り、一族の祭りをすませると、今度は祖父母や父など比較的近い死者の墓を家族で訪れることになる。この季節の山は人がいっぱいで、山が祭服で白く見えるほどであった。

墓祭は、今日でも行われているが、かなり簡略化され、秋夕の茶礼のあと一族で付近の墓を回ることが多くなった。これは、旧暦の正月と秋夕が公の祝日となり、村を離れた都市生活者たちの帰郷がこの時期に集中するために生まれた新しい傾向である。

しかし、祖先祭祀の仕方が一番大きく変わったのは、やはりセマウル運動のおかげである。それまでの祭りは、農事暦にそって旧暦で行われていたが、朴正熙大統領時代の1973年に「家庭儀礼準則法施行令」が施行され、すべて新暦で行うことになって、華やかさが一挙に失われた。この改革はラディカルで、当時の公務員は旧正月に休みを

とることが許されず、うっかり旧暦で正月を祝うために帰郷したりすると、さっそく首をきられた。学校もまた休みではなく、教師はその日になると特別に児童の欠席調査を行い、報告することを義務づけられたという。

2) 家の祭り

祖先祭祀が男たちによって主宰されるのに対して、家の祭りはほぼ女たちの独壇場である。すでに金吉炯氏宅の例でみたように、安東地方の家々には、大概つぎのような神が祀られている。

① ソンジュシン(成主神)

家の神のなかで最上位の神といわれ、他の神々を統括して家の安泰を司り、家長の健康や社会的地位などの運命を守る。家の中心となる梁に紙の御札をはることもあるが、瓶や俵に籾をつめて「マル」と呼ばれる板の間に安置することもある。この瓶を「ソンジュ・タンジ」などと呼ぶ。

② チョサンシン(祖上神)

家人の寿命や穀物、衣類などを司る神といわれ、ソンジュシンと同じくマルまたは内房に祀られる。神体は壷や瓶などの中に穀物、女性の衣類、韓紙、族譜などを入れたものである。これを祖上瓶(チョサンタンジ)、始祖瓶(シゾタンジ)などと呼ぶ。

③ サンシン(産神)

産の不浄を忌まず、産婦を守り、元気な子が生まれ、丈夫に育つよう守護する神。神体はパガジ(瓢箪)またはタンジ(瓶)で、内房の棚の上に安置されている。パガジやタンジの中には米が入っていて、秋の収穫の時に新穀と入れ替える。子供を産むとき、稲を植える時には、ご飯をたいて供える。

④ ヨンタンジ(竜瓶)

家族全体の健康を守る神。神体はタンジで、産神パガジと対をなす

形で内房の棚に安置されることが多い。これも中に米が収められている。

⑤ トジュシン(基主神)

屋敷の神。トジュの「ト」とは「宅地」を意味するので、日本風にいえば「地神さま」である。家と土地を守る。神体がない場合もあるが、大抵はタンジで、トゥエンジャンやキムチなどの瓶を保存する井戸の脇のチャンドクテや屋敷の裏などに安置される。

⑥ オップシン(業神)

家の財産や幸福を司る神。ヒキガエルなど家に住む小動物であることが多い。この動物が出ていくと家の福が逃げるといい、主婦が呼び戻しの儀礼を行う。

⑦ チュワン(竈神)

カマドの神。主婦をはじめとする女たちの健康と台所の食べ物を守る。神体がないこともあるが、台所の竈の上に小さな棚をもうけて、毎朝、主婦が水や塩を供えることもある。

⑧ 厠神

神体のないことも多いが、人に罰を与える恐ろしい神と考えられている。ことに便所に入る前には、咳払いを一つして合図をしないと、神の怒りにふれる。また便所に間違って片足をつっこんでしまった時には、ムーダンを呼ぶか、主婦がかわって祭りをしなければならない。

これらの神々の祭りは、成主神の場合をのぞいて主婦が行うのが原則である。主婦が、すでに述べた「内房渡し」を行ったり、心身の力の衰えをみせた場合には、長男の嫁に竜タンジ、基主神、竈神の祭祀権を譲り渡すことはあるが、産神、業神、厠神の祭祀は終生つづけて行うのが普通である。

これに対して成主神の場合は、一家の主がこれを祀ることが多く、家長が旅に出たりして長期の不在の場合のみ、主婦がその無事を祈っ

て成主神を祀るという。成主神を女が祀り、神体の籾の交換だけを男が行うこともある。

松潭の南門中の大家の一つ、南正鎮家の祭りを例にとろう。南家の場合には、奇妙なことにこの地方に多い産神を祀ることがなく、竜タンジ、竈神、成主神の三つの神だけが祀られていた。しかし、これら三神が、それぞれに家の神(竜タンジ)、女の神(竈神)、男の神(成主神)という家にとって本質的な三つの機能を分け持っていることは、銘記すべきであろう。そして、これらの神の祭りを行うのは、ハルモニの大切な役割であった。

竜タンジは内房にあり、瓶の中には米が納められていた。普段は、別に祈ることはしないが、旧暦の正月と秋夕には、ご飯を供えて祭りを行う。瓶の中の米は、秋の収穫の折りに新穀と入れ替えるが、客の来ない日を選んで、この米を炊き家内の者のみで共食をする。

この米を間違って外部の者に与えてしまうと、家の福を逃してしまうので、細心の注意が必要とされた。

竈神は、神体もなく、普段は祈ることもしないが、旧の正月一五日にロウソクに火をともして、祭りを行う。

成主神は、俵の中に籾を入れて、マル(板の間)に安置しておく。南正鎮家では、この神を祀るのも家長でなく主婦である。俵に納められた籾は、秋の収穫の後に入れ替えるが、その時の唱え言は「成主は大主を信じ、大主は成主を信じ、なにとぞ全てのことがうまく行くよう守ってください」というものである。また旧暦の正月一五日には、一番鶏が鳴くと村の入り口の共同井戸に行き、水をくみ、成主神に供えた。井戸には、竜神が住んでおり、この水は「竜の卵」であると信じられていたのである。

しかし、この成主神に関してもっとも注目すべきことは、神体の俵交換の儀礼である。これは家長が六〇才の還暦をすぎ、長男が奇数の年齢に達した年に行われる。この日は一日、門に白い紙をさした注連

縄をはり、ムーダンによる儀礼(クッ)を行い、神体の俵を新しいものに交換する。

これは、新しい家長の誕生儀礼であると言ってよいだろう。韓国には、家長の死に至るまで、隠居の制度がなく、祖先祭祀の権限の移譲もないが、実はその交替が家の祭りのなかに隠されているのではないだろうか。しかも、その交替が稲作の力を象徴する籾と俵の交換と結びついていることは、意味深い。

このように、家々の祖先祭祀と家の神の祭りを少し詳しくみてみると、そこには男たちを中心とした男系祖先の系譜を守る祭祀集団と、家の神の祭りを守る女系の祭祀集団とが、きわめて明確に分化していることが分かる。その祭祀の権利と義務は、祖先祭祀の場合には男子の家長に、家の神の場合には女子の主婦に委ねられており、その務めは死に至るまで守られる。しかしそこには、自ずから世俗的な権力との交錯があり、それぞれほぼ還暦の年を目安にして聖俗の権力の交替が用意されているように思われる。それが目に見えた形をとるのが、女子の場合には「内房渡し」であり、男子の場合には「成主の俵の交替」ではないだろうか。

3、まとめ

1989年4月に帰国して、以上のような調査の報告を専修大学社会科学研究所の月報318号に報告した。報告は、共同調査者であった金美栄と南富鎮との共同執筆の形をとっている(1990年1月20日刊行)。

その後、国際交流の仕事で学生たちを檀国大学に引率した折りに、授業の一環として翰林大学の若い民俗学者、南根祐氏の「韓国の家と神—家のなかの女性原理—」という話を聞くことができた(1992年7月24日)。南氏の発表は、私がここで述べたことをより大きな視野で検討しつくした見事なものであった。

南氏は、表1のような形で整理した上で、内房とマルは穀物の貯蔵空間としての共通点をもち、主婦の占有空間であると指摘している。内房とマルは、ともに穀物を保管する庫房の鍵を渡す「内房渡し」、「内房貰い」という主婦権移譲儀礼の場でもある。

女の空間をカオス、男の空間をコスモスと位置づけたことも、興味深い。男たちに代表される表の生活、公の秩序が枯渇の危機に瀕する時、家の祭りを行い、古いコスモスと文化を破壊して、カオスを生み、自然の新しい力を他界から呼び込んで、新たなコスモス、新たな秩序を再生させる。それが、女の役割だというのだろう。

韓国の伝統社会では、一般に女性の力はきわめて微弱であったとされる。たしかに、屋敷内の狭い女の領域に閉じこめられ、ろくに外出も許されなかった両班家庭の場合を考えると、その観が強いが、一般の農民社会ではそれだけではなかったように思われる。ことに男の子を産み、主婦の座に着いた女の地位は、男性と比べても遜色はない。主婦には、家の神の祭祀権がほぼ委ねられていたし、日常の家計は、完全にその支配下にあったといってよい。

ことに現金収入の少なかった農村の生活で、決められた日に市場に行ってものの売り買いをしたのは女たちであったし、主婦はその元締めであった。また日常の食生活の一切は主婦の仕事であったので、米の出し入れの管理から、飯の盛りつけに至るまで、女たちの領域を支配した主婦の力は絶大であったといえる。主婦の管理した様々の鍵は、この権力の象徴であったといってよい。これは、一方で嫁と姑の激しい葛藤を生み出すと同時に「内房渡し」のような世代交代の制度を生み出す基礎となった。

男たちの場合と同じく、あるものは譲渡され、あるものは死ぬまで保持された、家の神の祭りの権利と義務は、「内の人(アンサラム)」としての主婦の権力と悲哀の鍵でもあったのである。

伝統社会における男と女の役割を考察することは、柳田国男以来の

日本民俗学の課題である。家の神の祭祀権の問題は、それを解く大切な手がかりとなるだろう。これについては、すでに宮田登などのすぐれた仕事があるが、南根祐氏の精緻な考察は、この問題を深化し、その視野を広げる上で、韓国と日本の民俗学にとって大きな一歩になるものと期待している。

韓国民家における家空間の構成原理とシンボリズム

女の空間	
内房、マル、チョンジ(厨房)、チャンドクテ	舎廊房
内(裏)	外(表)
私	公
隔離	開放
暗	明
神のある空間	神のない空間
成主神(ソンジュシン)、祖上神(チョサンシン)、産神(サンシン)、竈王(チュワン)、基主神(トジュシン)	
家の神の担い手	村の神の担い手
あの世(他界、異界)	この世
カオス＝私的・秘匿的な反秩序空間	コスモス＝公的・開放的なタテマエの秩序空間
自然	文化

表1(1992. 07. 24.南根祐レジュメにより作成)